

私は、「舞姫」という小説を読んで一つ疑問に思うことがある。それは「舞姫」と言う作品は百年以上も前に書かれた作品であるにも関わらず、現代でもなお多くの人に読まれ、語り継がれているのはなぜだろうかということだ。明治時代にはたくさんの本が書かれているのに、その中で、「舞姫」が教科書に取り上げられているのには何か読者に読み取ってほしいという特別な理由があるに違いないと考えた。私はその理由と、「舞姫」が私たちに伝えている内容が知りたかったのである。このレポートではまず登場人物の関係から読み取れること、明治時代の精神から読み取れることを本文を基にして分析している。この分析の結果、私は「舞姫」と言う作品が私たちに「他人に依存しすぎるのは良くない」ということを伝えているのではないかという結論に至った。この結論に至るまでの経緯を次の文から説明していこうと思う。

まずは登場人物の関係から考えてみたい。「舞姫」の中にはさまざまな登場人物がいるが特に私は、豊太郎、エリス、相沢の三人の関係を見ていく。まず豊太郎とエリスはお互いにドイツで初めて出会い、恋に落ちて最終的にはエリスが子どもを授かるまでに至っている。豊太郎と相沢の関係としては、相沢は豊太郎にとっては窮地を救ってくれた恩人であり、豊太郎の失いかけた社会的信頼を取り戻すことができたのは相沢のおかげであろう。相沢とエリスの関係としては物語の終盤に交わりがあるだけでこれといった関係は描かれていない。この三人の関係は、物語中盤までは何事もなくうまく進んでいる。しかし、最終的には豊太郎は、愛するエリスを手放さなければならなくなり、心には一生の悩みを抱えていてエリスはなんと発狂してしまう。では、なぜ「舞姫」の最後はあれほど悲しいのだろうか。それは、やはり登場人物たちが他人に依存しすぎた結果ではないだろうかとは私は考える。豊太郎は本文中にもあるように上官のしいたルールをただひたすら歩むだけで自分の意思を出すことを恐れている。本文中より「外物を捨てて顧みぬほどの勇氣ありしにあらず、ただ外物に恐れて我が手足を縛せしのみ。」とあるように豊太郎は自分という人間を押し殺し、他人に依存して生きているのだ。また、エリスは豊太郎に対して依存しているように見える。エリスは本文中にもあるように、小さい頃から貧乏で、十五歳という若さで踊り子といった卑しい仕事を教えられ、少ない給金で束縛され、昼は稽古、夜は舞台と休みな酷使されたようにつらい生活を送っていた。そんな中、豊太郎といった少し地位もあり、将来性のある男に出会った。エリスと豊太郎の初対面の時に、豊太郎がエリスにお金を渡したという点から、私はエリスが恋に落ちた理由は豊太郎の財力を目当てにしていたからであると考え。豊太郎という人物は十九歳で早くも大学を卒業し、学士の称号も受けたりと、大学創立以来いまだかつてない名誉を手になっている。そしてわずか二十二歳で外国での任務を任されるなどいわばエリートなのである。その豊太郎の財力にエリスは惹かれたのであろう。もちろん本当の恋の気持ちを持っていたかもしれないがエリスは、将来が有望である豊太郎と一緒に

いれば裕福な生活が送れると考えたのである。今まで酷い生活をしていた自分を豊太郎ならそんなつらい毎日から解放してくれると信じていたのだ。エリスにとって豊太郎はいわゆる希望だったのである。このように、他人に依存していたこの人物たちは最終的には、その信じる人に裏切られるという形で取り返しのつかない状況に陥っている。もしもどんなにつらい生活でも自分を信じてひたすらに励めばもっと違う状況になっていたと私は考える。物語的に三人の中で一番悪い目に遭っていないのは相沢のように見えるが、この相沢もいつか痛い目に遭うだろう。相沢も天方という伯爵のいいなりになっているので相沢もまた他人に依存している。こういう訳で三人の関係は他人を信頼して依存しすぎたせいで崩壊したのだ。

ここで明治時代の精神について触れたいと思う。明治時代の精神として「天皇を中心とした中央集権の国体が明確に刻まれ、それを護持することが国家の禄を食むものの債務であるとも理解していた。責任の遂行には命を賭けるのだ。」というものがある。これを読んだとき私は立派だと思った。しかし、こういう思想が栄える明治時代に多くの反乱があり、国が乱れていたのを知って驚いた。やはりその時代の人々も思想に依存しすぎたのかと考える。国を良くするというその時代に従って行動さえしていれば、じきに国は良くなるという勘違いをし、間違った方向へと進んでいったのだと思う。やっぱり思想であっても依存しすぎるのは良くないのである。

では、なぜ「舞姫」が百年以上経った今も読み続けているのだろうか。ある人はこう語っている。「この小説が一種の美文で書かれているためであろう。声に出して読んでみると、漢文を朗読したときに得られるような香りがある。」と。確かに、「舞姫」の文は漢文のようであり、現代文にはない雰囲気を持っている。しかし、わたしはこう考える。人々は「舞姫」を読むことによって人々は他人に依存しすぎてはいけないということを学んでいるのだ。いくら科学技術が発達したり、インターネットも普及し、世界の人々とのつながりが強くなったといってもやはり最後に信じられるのは自分だけということを知っていなければならない。人間とは何をするにだって自分の意思が必要であり、他人に頼ってばかりでは、いつまで経っても立派な人間になることはできないのである。「舞姫」という作品はそんな忘れかけた事実を思い出させてくれるという重要な役割を担っているのであろう。人々はこのような重要な役割をもった作品を後世に伝えていっているのであると私は考える。

しかし、私は他人に頼らず生きていくことはできない。自分ひとりだけでうまくやっていく自信もなくして失敗するだろう。やっぱり、私は他人とうまくやっていくことも必要だと思う。しかし、その時に依存しすぎるのは良くないということである。自分の意思や考えを持った上で他人の意見と調和させることこそが本当に大切なことであると思う。私は「舞姫」から学んだことを生かして他人に依存しすぎずに自分の力を信じて生きていこうと思った。